隨筆・佐々木小次郎

村上元三

隨筆・佐々木小次郎

村上元三

朝日新聞社刊

隨筆・佐々木小次郎

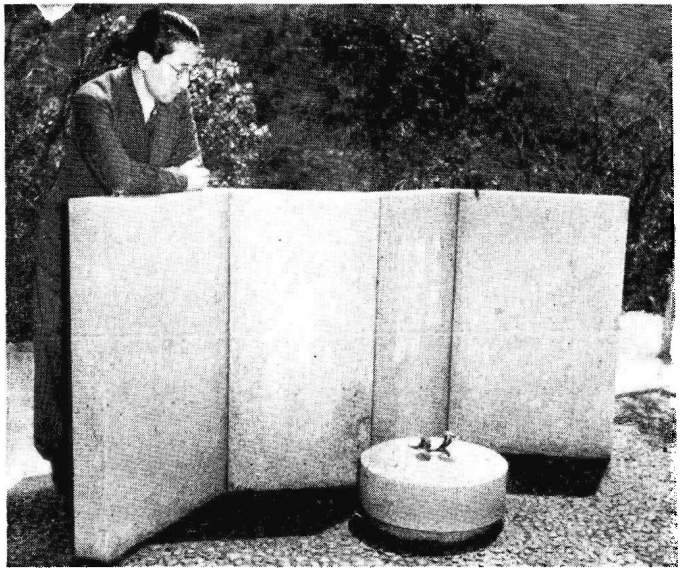
昭和二十七年七月一日印刷
昭和二十七年七月五日発行

定価一七〇円

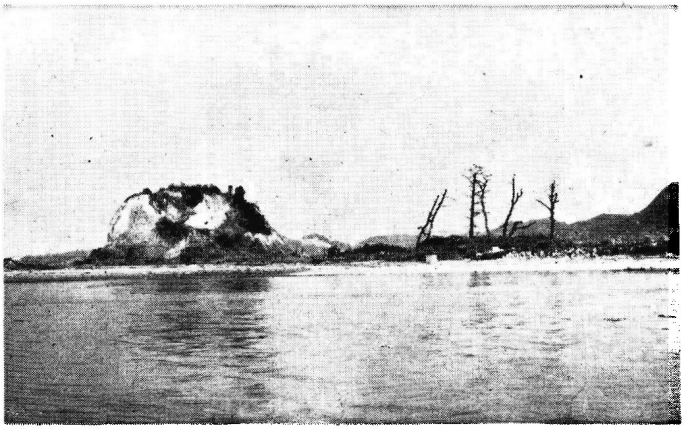
著者　村上元三
発行者　杉山胤太郎
印刷者　矢板東一郎
発行所　東京丸ノ内
大阪中之島
小倉砂津
朝日新聞社

印刷・明善印刷株式会社

小次郎出版記念会にて挨拶する著者
と長谷川伸氏(右)と土師清二氏(左)



小次郎碑と著者



海上より嚴流島を望む

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

裝幀・木下二介

村上元三図書

「源　義　経」

第一卷・B6・三二四頁・定価二三〇円
第二卷　近刊

「佐々木小次郎」

上卷・B6・三六〇頁・定価二〇〇円
中卷・B6・三一二頁・定価二〇〇円
下卷・B6・二九二頁・定価二〇〇円

隨筆・佐々木小次郎

目次

佐々木小次郎雜話　三
亡き母の情け　三七
「小次郎」の旅　四一
「嚴流島」への旅　四五
私への投書　五七
四人小次郎　六三
小次郎博多みやげ　六七
若い女性と佐々木小次郎　七九
わが石燈籠　八七
沖繩幕情　九五

八艘飛びの酒　一〇一
岸柳異説　一〇七
敵討巖流島（戯曲）
巖流島敵討（写本）
佐々木眼龍流島実録記（写本）
小次郎碑のこと　一四一
小次郎祭　一五七
菓子合戦　一七五
出版記念会　一八三
小次郎いろいろ　一九七
あとがき　二一三

隨筆・佐々木小次郎

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

佐々木小次郎雑話

一

私の書いている佐々木小次郎という人間を、暗い、と初めて会つて批評した人がいる。そういつたあとでその人は、ほかに書きたいと思つている歴史上の人物は、とラジオの「私は誰でしよう」のような質問をした。

それで私が、いま書きつつあり、また書きたいと思つて資料を集めている人物は銭屋五兵衛、それから加賀騒動の張本人で悪者だと一方的な解釈をされてきている大槻内蔵允(伝蔵)、もう一人は、源義経だと答えると、その人は、みな悲劇的な最期をとげた人物ば

かりですね、といつたあとで、そういう人物ばかり好きなのは貴方が暗い生活を送つてきたからに違いない、と断定を下すような顔をした。

私はびつくりして、いやいやそんなことはない、とあわてて説明した。

いま書いている佐々木小次郎という人間は、大成した人物ではないし、失敗や迷いも多い。しかしその度に反省をして、自己を建て直そうと気がつくことは知つている人間なので、勢い颯爽たるところが多くない、それで暗く見えるのではないか、といつた。

作者の私という男は、暗い人間ではないし、第一、暗い生活というのを一度も経験したことはない。二十歳ぐらいの頃までは順調に育ち、それからは多少の苦労もあり、作家たらんと志した二十五歳の時からは、貧乏は経験してきている。しかし、今夜の米が買えない時にも、暗い気持になつた事は一ぺんもない。その頃の世間はのん気だつたから、というのではなく、私という人間が、そういう性分を持つているせいだ、と思う。

だから現在も、家内に子供が三人、家事の手伝いをしてくれている婦人がひとり、犬が三匹、という私の家の中から、いつもげらげらという笑い声が絶えないし、私も物心づいてから四十歳の今日まで、病気で臥た経験は一度も持たず、仕事でも徹夜をする習慣はな

い。子供に醉態を見せるのがいやなので、家では酒をのまないことにしている。酒が好きなのではなく、飲むのが好きなので（酒好きと飲み好きとは違う、と私は思つている）気の合つた友だちと外で飲み出すと、梯子の癖が出て、夜おそく帰つてくる時があるくらいが欠点で、碁も将棋も麻雀も知らず、野球もわからない。無理をして金を貯めよう、という気持はなし、金は自然に貯るのが本当だ、という考えでいるため、毎月入つただけ出て行く。僕には浪費癖がある、と女房がいうが、そういう女房自身も、むかし学校の教師をしていた癖に、至つて計算が下手で、人が困つていると直ぐ金を出したがり、あとで財布の中をのぞいてあわてる時が多い。

しかし、こういつたからといつて、僕の家庭はずぼらなのでなく、いつでも子供を中心にした健康で明るい雰囲気を持つている。

だから私は書くものでも、暗い印象を与えることはあつても、救いのないものは書きたくない、というのを念願の一つにしている。

佐々木小次郎にしても、最後には船島で宮本武蔵との試合に敗れ、いのちは落したが、私はそれを悲劇には書かない積りでいる。

たいていの読者も批評家も、私が吉川英治氏の「宮本武蔵」を目標において佐々木小次郎を書き出した、と見ているようだが、私にはそういう気持は無かつたし、いまも無いし、これからもない。

だいたい何う思いついて佐々木小次郎を書く気になつたかというと、最初、それを私に思いつかせたのは、新国劇の島田正吾だつた。

去年の十一月に帝劇で上演するのを目的に、島田が私にやつてくれといつて持つてきた仕事は、吉川氏の「宮本武蔵」から佐々木小次郎の件だけを抜き出して脚色して欲しい、というのであつた。

私は脚色というのは、あくまで原作に忠実にやるか、でなければ原作をばらばらに解きほぐして自由に組立てるか、二つに一つしかないと思つているし、忠実な脚色なら他にうまい人もいるのだし、後者を選ぶとすれば、数多くの読者や観客が武蔵に対して抱いている夢をこわすのは、まだお目にかかつたことはないが、同じ道の大先輩である吉川英治氏に失礼だから、という理由で、脚色を辞退した。

そうすると島田は、では元さんの創作で、おれが頭に描いている佐々木小次郎を書いて

くれ、と話を再転させてきた。十一月の帝劇出演は新国劇にとつて不利なので、客を呼ぶための演し物をしなくてはならないのだから、というのであつた。

新国劇と私との付合いは古いことだし、私の書いた「先駆者の旗」という北海道屯田兵を扱つた脚本を昭和十四年にはじめて大劇場で上演してくれたのも新国劇だし、私は友人の島田正吾のために、創作「佐々木小次郎」を書くことを引きうけた。

しかし島田が、おれはこういう小次郎をやりたいのだ、と註文をつけた小次郎は、やはり吉川英治氏の原作に現われている性格を下地にした小次郎であり、それまでしばしば新国劇が上演してきた扮装の小次郎だつた。

やりにくい仕事だつたが、私は島田の註文の中に私の夢も入れて、脚本を書きあげ、京都まで稽古に行つて、島田と二人で、ずいぶん脚本をいじりまわした。

さて帝劇で上演してみると、新国劇が望んでいたほどの入りもないし、批評もよくなかつた。

この間、島田が夕刊朝日に「不評、好評」という題で、そのときの事を書いていた中に、私が観客の批評を耳にして面目なさそうな顔をした、という一節があるが、あれは島

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.